

## プリキュア名と両唇音の音象徴\*

川原繁人 (慶應義塾大学)  
kawahara@ic1.keio.ac.jp

プリキュアとは 2004 年に始まった (主に) 女の子向けのアニメ番組で、2019 年で 16 シリーズ目を迎えた。この番組では、女の子が「プリキュア」という戦士に変身して悪と戦うことが基本コンセプトになっている。どのプリキュアを正式なプリキュアと数えるかには議論の余地があるが、2019 年 3 月の時点で、映画のみに登場したものを含めると、61 人のプリキュアが存在する (表 1 参照)<sup>1</sup>。

ここで、音声学の基礎的な知識をもって、『フレッシュプリキュア!』に登場するプリキュアの名前を見てみると、「(キュア) ピーチ」「(キュア) パイン」「(キュア) ベリー」「(キュア) パッション」で、全て両唇音である [b]か [p]で始まっていることに気づく。『魔法つかいプリキュア!』のプリキュアは、「(キュア) マジカル」「(キュア) ミラクル」「(キュア) フェリーチェ」で、同じように全員の名前が両唇音である [m]か [ɸ]で始まっている。名前の語頭子音に注目して他のプリキュアの名前を見てみると、名前が両唇音で始まるプリキュアが多い。そのようなプリキュアがないシリーズは、16 シリーズ中、『ドキドキ!プリキュア』のみである。表 1 に、プリキュアの名前のリストを示す。接頭辞の「キュア」は省略し<sup>2</sup>、語頭が両唇音であるかどうかで分類している。

表 1: 2019 年 3 月時点でのプリキュアの名前リスト。語頭が両唇音か否かで分類。IPA での表記は、Kawahara (2019b)を参照。

シリーズ	語頭=両唇音	語頭≠両唇音
ふたりはプリキュア (Max Heart)	ブラック	ホワイト シャイニールミナス

\* 本発表は、ICU Working Papers in Linguistics VII に掲載された英語論文を発展させたものである (Kawahara 2019b)。発表者の音象徴研究は、JSPS Grant #17K13448 の援助を受けている。本研究の発見は、娘とフレッシュプリキュア遊びをしているときに得られたものである。子育てをしながらも、新しい研究のテーマを発見できることに気づかせてくれた娘 (のプリキュアに対する情熱) に感謝する。本発表は、本研究を教育へ応用すること、および、音声学をより多くの人に知ってもらうことを強く意識している。本稿に誤りがあるとするれば、それはザケンナーやノットリガーたちの仕業である。

<sup>1</sup> 2019 年 3 月出版の『プリキュアオールスターズスーパー大ずかん、講談社』に載っている 59 名および映画のみに登場する 2 名を含む。

<sup>2</sup> プリキュアがお互いの名前を呼ぶ場合、「キュア」は省かれる。

ふたりはプリキュア スプラッシュスター Yes!プリキュア 5GoGo!	ブルーム ミント ミルクローズ	イーグレット ドリーム ルージュ レモネード アクア
フレッシュプリキュア!	ピーチ パイン ベリー パッション	
ハートキャッチプリキュア!	ブロッサム マリン ムーンライト	サンシャイン
スイートプリキュア♪	メロディ ビート ミューズ	リズム
スマイルプリキュア!	ピース ビューティ マーチ	ハッピー サニー
ドキドキ!プリキュア		ハート ダイヤモンド ロゼッタ ソード エース ラブリー ハニー
ハピネスチャージプリキュア!	プリンセス フォーチュン	
Go!プリンセスプリキュア	フローラ マーメイド	トゥインクル スカーレット
魔法つかいプリキュア!	マジカル ミラクル フェリーチェ	
キラキラ☆プリキュア アラモード	マカロン パルフェ	ホイップ カスタード ショコラ ジェラート
HUGっと!プリキュア	マシェリ	エール

		アムール
		アンジュ
		エトワール
スター☆トゥインクル	ミルキー	スター
プリキュア		ソレイユ
		セレーネ
映画	モフルン	エコー

表 1 に見られるように、61 人中 29 人のプリキュアが両唇音で始まる名前を持っている (47.5%)<sup>3</sup>。この値は高いように感じられるが、この「両唇音で始まる」のがプリキュアに特別に見られる傾向であることを客観的に示すためには、比較となる対照群が必要となる。そこで 3 つの対照群、(1) 明治安田生命で公表されている人気の女の子の名前トップ 50 (2016 年版)、(2) ウルトラマンの名前、(3) プリキュアの変身前の名前、それぞれについて、語頭が両唇音であるか分析した。(1) はプリキュア名と比較するのに適していると思われるが、プリキュアの名前のように英語やフランス語をベースにした名前は珍しく、[b]や[p]で始まるものは非常に希である。よって、男の子向けの番組であり、「メビウス」など英語をベースにした名前も多く含むウルトラマンの名前 (2) も比較の対象とした。(3) は慶應義塾大学の授業でこのテーマを扱った際に、ある学生が提案してくれた対照群である。ほとんどのプリキュアは、変身前は普通の女の子 (たまたに妖精) であり、人間の名前を持っている (例:「キュアブラック」の変身前の名前は「美墨なぎさ」)。「語頭=両唇音」がプリキュアの特徴なのであれば、変身前と変身後の名前を比較するのがもっとも妥当といえるかもしれない。変身前の名前のリストは、スペースの都合上割愛する (Kawahara 2019b を参照)。結果として、語頭が両唇音である確率は、(1) で 14% (50 人中 7 人)、(2) で 12.8% (39 人中 5 人)、(3) で 16.4% (61 人中 10 人) であった。これらと比較すると、プリキュア名が両唇音で始まる確率 (47.5%、61 人中 29 人) は非常に高いことがよくわかる。

ここで、統計的な有意差の判定のために、ブートストラップ信頼区間を計算した (Efron & Tibshirani 1993)。プリキュアの世界は一つしかないので、ばらつき (variability) の尺度が計算できない。また、プリキュアの名前の語頭が両唇音である確率は、サンプルではなく母集団全体に関する値であり、一般的な統計検定は妥当ではないと思われる。よって、今回の計算では、61 人のプリキュアから、ランダムに 1 名のプリキュアを 61 回復元抽出 (resampling with replacement) し、それを 50,000 回繰り返した。復元抽出を行うと、同じプリキュアが 2 体以上いたり、あるプリキュアがいなかったりする新しいプリキュア世界が

<sup>3</sup> 本分析が終了した後、2019 年 6 月の後半に新しいプリキュアが加わった (プリキュアシリーズでは、途中で新しいキャラクターが加わることは珍しくない)。彼女の名前は「(キュア) コスモ」であり、残念ながら両唇音で始まらない。ただし、彼女を担当する声優は自らがプリキュアになるとしたら「(キュア) ウォッカ」と名乗ると語ったことがある ([https://dic.pixiv.net/a/キュアコスモ#h3\\_3](https://dic.pixiv.net/a/キュアコスモ#h3_3)、最終アクセス 2019/07/19)。

得られる<sup>4</sup>。ただし、どの新しいプリキュア世界でも、プリキュアの総人数は常に 61 名である。このような新しいプリキュア世界を 50,000 個生成し、「語頭＝両唇音」の確率を各世界で計算し、上下 2.5%を切り捨てると、95%ブートストラップ信頼区間が得られる。プリキュアの名前が両唇音で始まる確率の信頼区間は 34.4%—60.7%であった。上で述べた 3 つの対照群の信頼区間も同様に計算すると、それぞれ 6%—24%、2.6%—23.1%、8.2%—26.2%であった。プリキュアの信頼区間の下限は、どの対照群の信頼区間の上限よりも高い。よって「プリキュアの名前は両唇音で始まる可能性が高い」ことは、統計的にも裏付けられる。

では、なぜプリキュアの名前は両唇音で始まることが多いのであろうか。本発表では、最近研究が盛んになりつつある「両唇音の音象徴」に着目したい。まず、日本語のオムツの名前には両唇音で始まるものが多い（「ムーニーズ」「マミーポコ」「メリーズ」「パンパース」）（川原 2017）。また、無意味語を使った実験でも両唇音が入った名前がオムツの名前として良いと判断されやすく、新しいオムツの名前を考えてもらう産出実験でも、両唇音が入った名前が多く提案される（熊谷・川原 2017）。また、ポケモンの名前の音象徴の研究でも（Kawahara et al. 2018 *et seq.*）、実在のポケモン名を分析すると「妖精タイプ」のポケモンの方が悪役の（ような）ポケモンよりも両唇音を含む可能性が高い（Hosokawa et al. 2018）。このポケモン名における両唇音の音象徴は、無意味語を使った実験によっても生産性が確認されている（Kawahara & Kumagai 2019）。また、ニックネームの音象徴的研究である Kumagai (2019) では、[p]の音は特に日本人によって「可愛い」と判断されることが分かっている。AKB の島崎遥香<sup>はるか</sup>がニックネームとして「ぱるる」を使っているのも、この音象徴の一例として挙げられる。まとめると、「両唇音＝赤ちゃん、純粹、可愛い」といった音象徴的つながりが日本語で成り立っている。さらに言えば、この音象徴は赤ん坊の喃語に両唇音が多く現れる（Jakobson 1941/1968）という観察に基づいている可能性もある。上記のプリキュア名のパターンも、この両唇音の音象徴に起因している可能性がある。

この推察が正しいとすると、実在語を用いて名づけを行う際、どのような実在語を選ぶかという選択に、音象徴的な原則が影響を及ぼす可能性がある結論づけられる。例えば、『フレッシュプリキュア！』シリーズでは、キャラクター名に果物の名前を用いており、「ストロベリー」「オレンジ」「グレープ」などを用いてはいけない理由はない。それにも関わらず、実際のプリキュア 4 人中 4 人とも、すべて両唇音で始まる名前が付けられている。一般的に言語学では、意味と音の関係性は（とくに実在語では）恣意的であると考えられているが（Saussure 1916 他）、今回の結果は、実在語の選択という文脈においても、意味と音のつながりの恣意性が必ずしも成り立たないことを示している（Kawahara et al. 2018）。

プリキュア名に両唇音が多いという観察が音象徴的な原則から来ているとすると、他の音象徴パターンがプリキュア名の中に潜んでいる可能性も考えられる。この観点から表 1 を見直すと、まず「ラ行」(=/r/) の多さに気づく。61 人中 35 人の中に /r/ が含まれており

<sup>4</sup> 本発表で用いた R を使ったブートストラップ法のデモスクリプトは発表者のウェブサイトからダウンロードできる。

(57.4%, CI=44.3—70.5%)、これは一般的な女の子の名前 (18/50, 36%, CI=24—50%) よりも多く、ウルトラマンの名前 (10/43, 23.3%, CI=11.6—37.2%) に比べても明らかに多い。この観察は、『クラテュロス』の中でソクラテスが考察している「r/=動き」という音象徴 (427) が関わっているとも考えられるが、古代ギリシア語のr/は震え音であったのに対して、日本語のr/は弾き音として実現することが多いので、解釈には注意が必要である<sup>5</sup>。また、日本語の単音の音象徴的評価実験を行った磯中他 (2015) によると、日本語の「ラ行」は「最も透明度が高い」と判断されることが分かっている。プリキュアたちは女の子のアイドルである。そんな彼女たちが、名前に「透明性」という属性を持つことは意味があると考えて問題ないであろう。

プリキュア名のもう一つの際だった特徴は、濁音の分布に見られる。日本語では特に「濁音=汚い」というイメージが強く、女の子の名前では濁音が避けられることが多い (川原 2017)。実際に明治安田生命の人気の名前でも、濁音が入っているのは 50 のうち 2 つのみである。それに対して、プリキュア名の場合、61 中 23 の名前に濁音が入っている。上記の磯中他 (2015) の研究では、濁音は日本語子音の中で最も「透明度が低い」とされており、「ラ行」の多さと矛盾するようにも思える。しかし、濁音の音象徴的イメージには「汚い」だけでなく、「力強い」というものもあることに注意したい。例えば、ポケモンの名前に含まれる濁音の数は、そのポケモンの強さと正の相関を示す (Kawahara et al. 2018)。プリキュアは「女の子のアイドル」であるとともに「悪と戦う戦士」である。よって、プリキュア名に濁音が多く使用されるのは、プリキュアの力強さを表現するためかもしれない。

一般的に、人間性というものは多次元的であり、その名前の中に様々な音象徴パターンが含まれていても不思議ではない。デザイナーたちが名前を考える際、プリキュアに対して「可愛い」「透明感のある」「力強い」という 3 つの属性を音象徴によって表現しようとしていても不思議ではない。

最後に、本研究の教育への応用について述べる。ともすればとっつきにくいと思われがちな音声学であるが、音象徴を使って身近な題材を分析すると、学生が興味を示しやすくなるという報告がある (Kawahara 2019a; 川原・桃生 2018, 2019)。本研究の紹介を通して、両唇音という概念やブートストラップ法という統計手法を楽しく学生に伝えることができる。実際に慶應義塾大学の授業では、プリキュアを題材として扱った際に良い反応が得られた。発表者の音声学の授業では、ポケモンの名前やメイド喫茶のメイド名の音象徴分析を取りあげることになっているが、2019 年度の春学期の授業では、本発表で論じるプリキュアの分析も題材として扱った。以下は、その授業に対する学生の意見の一例である。

今回の授業ではポケモンだけでなくプリキュアやメイドカフェやラップなど、音象徴の法則が使われているあるいは発見できる具体的な例を多く見ること

<sup>5</sup> ただし、日本語のラ行の子音は、一般的には「弾き音」と言われているが、実際の音声実現は多様であることは留意すべきであろう (Arai 2013; Kawahara & Matsui 2017)。

ができて、音声学を身近に感じることができた。

本研究のような身近な題材を使った音象徴研究が、音声学の教育現場で有効に利用され、音声学がより多くの人に知られることを強く望む。

## 参考文献

- 磯中佑樹・菅野由弘・渡部芳奈子・匂坂芳典 (2015) 日本語単音の音色が人に与える印象. 日本音響学会講演論文集 919-922.
- 川原繁人 (2017) 『「あ」は「い」より大きい! ?』東京: ひつじ書房.
- 川原繁人・桃生朋子 (2018) 音象徴で言語学を教える: 具体的成果の紹介を通して. *Southern Review* 32, 3-14.
- 川原繁人・桃生朋子 (2019) ポケモン音象徴データを音声学教育に用いる: データ分析・統計を中心として. 草稿. 慶應義塾大学.
- 熊谷学而・川原繁人 (2017) 音象徴の抽象性: 赤ちゃん用オムツのネーミングにおける唇音. 音声学会第31回全国大会予稿集, 49-54.
- Arai, Takayuki (2013) “On why Japanese /r/ sounds are difficult for children to acquire”, *Proceedings of INTERSPEECH* 2013. 2445–2449.
- Efron, B. & R. J. Tibshirani (1993) *An Introduction to Bootstrapping*. Chapman and Hall/CRC., Boca Raton.
- Hosokawa, Y., N. Atsumi, R. Uno & K. Shinohara (2018) “Evil or not? Sound symbolism in Pokémon and Disney character names”, *Poster presented at the 1st international conference on Pokémonistics*. Keio University, May 2018.
- Jakobson, Roman (1941/1968) *Kindersprache, Aphasie und allegemeine Lautgesetze [Child language, aphasia and phonological universals]*. The Hague: Mouton.
- Kawahara, Shigeto (2019a) “Teaching phonetics through sound symbolism”, *Proceedings of ISAPh*.
- Kawahara, Shigeto (2019b) “What's in a PreCure name?”, *ICU Working Papers in Linguistics VII: Festschrift for Professor Tomoyuki Yoshida on his 60th birthday*, 15-22.
- Kawahara, S. & G. Kumagai (2019) “Inferring Pokémon types using sound symbolism: The effects of voicing and labiality”, *Journal of the Phonetic Society of Japan* 23(2).
- Kawahara, S. & M. F. Matsui (2017) “Some aspects of Japanese consonant articulation: A preliminary EPG study”, *ICU Working Papers in Linguistics II*, 9–20.
- Kawahara, S., A. Noto & G. Kumagai (2018) “Sound symbolic patterns in Pokémon names. *Phonetica* 75:3, 219–244.
- Kumagai, G. (2019) “A sound-symbolic alternation to express cuteness and the orthographic Lyman's Law in Japanese”, *Journal of Japanese Linguistics* 35:1, 39–74.
- Saussure, F. (1916). *Cours de linguistique générale*. Payot, Paris.